

### 1 自己評価及び外部評価結果

#### 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390200352		
法人名	株式会社 大洲産業		
事業所名	グループホーム 清風		
所在地	熊本県八代市沖町6番3783-1		
自己評価作成日	令和1年8月29日	評価結果市町村受理日	令和元年11月29日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaijokensaku.jp/43/index.php">http://www.kaijokensaku.jp/43/index.php</a>
----------	---

#### 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	令和元年9月19日		

#### 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

・利用者のこれまでの暮らしを大切にしたい支援に力を入れています。出来ていたことが続けてできる様に、家ではないけれど、ここでよかったと思って頂けるように、スタッフみんなで話し合い、考えケアにあたっています。

・食と活動に力を入れています。利用者と一緒に献立を考え、食べたいもの・旬の物・栄養バランスを考え、少量づつ品数多く提供しています。活動は利用者の体調・気分と相談しながら、活動内容を考え利用者も職員も楽しみながら共に暮らしています。

#### 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

代表者の「自らが入りたくなるような施設を作りたい」との思いから開設したホームは、3年目を迎える中で個々の入居者のこれまでの暮らしぶりが反映される支援の充実を掲げ、チーム一丸となって取り組んでいる。異動による職員の入れ替わりも少なく、馴染みの関係性が思いの引き出しに活かされ、入居者のそばで会話をしながら記録をとる職員や、テーブルを囲みながら発せられた一言が支援の糸口となっている。入居者同席型の運営推進会議は、参加者に開かれたホームの現状を伝え、参加者や外部の意見が避難訓練とタイアップしたり、新たな災害マニュアルの充実に向け作成に着手するなど会議の場が活かされている。夏場の暑さ対策への配慮や、1日旅行の見送りなどに代表者の気遣いが窺え、今後運営推進会議等への参加が更なる信頼につながるものと期待されるとうところだ。

### V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

### 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念についてカンファレンス等で話し合い、より具体的な介護理念を考え、職員が同じ方向を向いてより良いケアできるように努めている。	平成29年4月の開所以来、離職の少ない職場環境が定着しており、理念をより具体化したケア理念を日々の支援の柱として位置づけている。職員は“気づきノート”を通じ、日常の支援の在り方や疑問、入居者とのやり取りや提案などを書き記し、共有することで課題の改善やケアの統一につないでいる。新たに入職した職員や地域へ向けてもホームの姿勢を発信している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の自治協議会には毎月参加し、地域の情報を得るとともに、ホームの状況などを発信する環境が整っている。また、同じ圏域の施設が集まりお茶を飲み語り合う場もあり、利用者・職員共に良い交流の場となっている。	開所時からの地域交流は継続され、自治協議会が情報交換の場となり、ホーム運営に反映されている。地域資源を活用した外出や、普段の散歩、法人施設や保育園児との交流、大型商業施設での物品購入、個別の買い物支援など入居者が地域出る機会がもたれている。	事業所間交流の一つである“ひなカフェ”が5事業所から10事業所に増えるとのことであり、入居者が地域出て人々と交流する機会を今後も後押しし、地域交流が図られていくことが期待される。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議などの場で、認知症の研修で学んだ事を地域の方に伝えることが出来ているが、会議に参加された方のみで、地域の方々に向けての発信は十分なものとは言えない。今後は勉強会の開催やホームでの催し物に地域の方にもご参加呼び掛けたりなど工夫していきたい。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	毎回の運営推進会議で、日々の活動報告や職員研修会の内容報告、また、ヒヤリハットや事故報告なども行い、参加者の皆様からご意見を頂き、今後のケアに生かすことが出来ている。	行政や包括、地域代表者や家族等とともに、入居者が会議に同席することで参加者は入居者の表情や普段の暮らしぶりを実際に目にし、会議内容とリンクしながら行なわれている。前回の外部評価を受けて、会議の中に避難訓練の機会を設けたことで、地元消防団からのアドバイスやあらゆることを想定した緊急時対応マニュアルへの着手などにつながっている。	マニュアルの整備について、管理者は会議参加者や関係者に広く意見を聞きたいとしており完成が待たれる。また、同法人の運営推進会議に参加し、互いの質の向上に努めており、相互の連携が期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議には、市役所からもご参加いただき、ご意見を頂いている。また、会議以外でも、グループホーム部会の研修会に講師としてお越し頂き、制度変更時や、高齢者虐待等についての指導をして頂いたりなど密に協力し合っている。	運営推進会議に参加する行政担当者には、入居者の普段の姿を直接見てもらうことでホームの透明性を図り、会議の中でヒヤリハットと事故報告の捉え方についても認識不足に対する指導を真摯に受けとめている。行政主催の研修会参加の検討や、グループホーム連絡協議会では法改正に伴う講話を受け、地域同業者との情報交換により更に連携を深める様努力している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	3ヶ月に1回は身体拘束適正化検討委員会を開催し、ホームの現状や課題をご利用者様、ご家族、地域の方、職員が集い話し合うことが出来ている。また、内部研修・外部研修などに積極的に参加し身体拘束をしないケアの実践に向け取り組んでいる。	ホーム内の勉強会や地域同業者との合同研修において、虐待や身体拘束について共同で学ぶ機会をもっている。また、それらの内容は運営推進会議でも紹介され、拘束を行わないことを前提としてホームの基本姿勢を啓発している。職員は虐待ではないもののグレーゾーンの明らかな虐待ではないケアについても、日常の支援に照らし合わせ、振り返りの場を持っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	内部研修・外部研修で最低でも年に2回の研修参加を呼び掛けている。また、定期的に虐待の芽チェックリストで自分のケアの振り返りを行うとともに、日々のケアの中でも不適切なケアでは？と感じたことは、職員間で共有できるようにしている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	研修会に参加し、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学びを深めている。定期的に研修を行うことで制度の違いや活用方法などの理解につながっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時の契約時は重要事項説明書・契約書を一緒に読み確認しながら契約を行っている。また、報酬加算の変更時なども個別に説明し対応し、重度化に伴う機器等の導入についても、話し合い対応している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議で参加ご家族からの意見を頂いたり、面会時に意見・要望などがなくを確認するようにしている。また、直接言いつらいことは、書面でご意見頂けるように、意見箱を設置しより多くの意見・要望を出してもらえるようにしている。	普段の面会や運営推進会議、小旅行や各行事など家族の来所の機会は多く、入居者の日々の生活を見てもらいながら、忌憚のない意見を貰う様投げかけている。面会に訪れた家族からは、「職員の担当制があるなら知らせてほしい、もったいない」など職員を気遣い、ホームのより良い運営の力になりたいとする意見があがっている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	年2回、個人面談の時に職員からの意見や提案を聞きとり、その内容を代表に伝え、改善できる事は改善してもらっている。また、それ以外でも、管理者を通じ代表に提案する機会があり、職員の意欲向上につながっていると思われる。	管理者は職員との年2回の個人面談を通じ、ケア改善につながる意見や、ホームへの要望などを聞く機会をもっている。必要によっては代表者へ声をあげ、改善に向けた努力をしている。職員は各研修で自己研鑽に努め、資格取得のバックアップとして研修費の支援などがおこなわれている。	代表者は管理者からあがった職員意見に早い段階で対応し、夏場の暑さ対策に各居室窓にはこの夏サンルーフが設置されている。職員の中からは代表者と直接話をしたいなどの意見もあり、今後、毎回でなくとも運営推進会議や職員会議等でホームの現状を確認されることが必要と思われる。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表は、職員のスキルアップの為に研修などへは、費用を負担し職員が勉強しやすい環境を整えてくれている。また、グループホームが利用者様にとっても職員にとっても楽しい場所になる様、催し物や野外活動などについても、いろいろ協力してくれている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	毎月の内部研修と外部研修で認知症介護のスキルアップを図っている。また、年2回は職能評価シートを用いて自己評価を行い、振り返りと、新たな目標設定を管理者と共に行っている。初任者研修・実践者研修・リーダー研修などへも積極的に受講を進めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	毎月の内部研修では、当ホーム以外にも他3カ所の事業所が集まり研修会を開催しているが、そのことにより、自分のホーム以外の介護について知る機会になり、自分たちの困っている事の相談などしやすい環境が整い、サービスの向上につながっている。		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居申し込みがあったら、ご本人の話をしっかり聞き、困っている事、不安に感じている事などの把握に努めている。また、ご本人がホームに来ることが出来ない場合は、こちらから出向き、本人の気持ち・状態の把握に努める。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご本人と同様、ご家族の話もしっかりと聞き、困っている事、不安に感じている事など把握に努める。また、ホームでどの様に暮らしてほしいのか、要望などもお聞きし、できる限り意向に添えるようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居のご相談があれば、よく話を聞き事業所内で話し合い、利用者様・家族にとって最善の支援を検討している。事業所だけでは判断できない時は、他の事業所や包括支援センターなどの相談し検討している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者様と職員は一緒に働き、一緒に食事し、一緒に笑い合い、互いに助け合って暮らしている。私たちのわからない事は利用者様に教えてもらい、利用者様の出来ない事は職員がお手伝いする。暮らしを共にする者同士の関係が出来ている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入居されているが、本人様とご家族の関係が変わることがない様に、面会や外出などをお願いしている。また、本人の要望などを家族に伝え、可能な限り対応して頂くようお願いしている。家族から要望があれば職員も同行し対応している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの人や場所を大切にするケアを心がけ、馴染みの喫茶店や美容室、行きつけのスーパーなど出かけるようにしている。自宅の草が気になる時には一緒に草引きに行ったりしている。	職員は入居前の生活になるべく近づけるよう、これまでの商店や美容室の利用、医療支援など個別に対応している。苗選びから始まる菜園作りには草取りや収穫を通じて入居者の残存能力を引きだし、懐かしいセリ摘みやつくし採りの後は下処理を全員で楽しみ、料理の一品として食卓を彩っている。盆・正月の外出や墓参り、月命日ごとの帰省など家族の協力による支援も継続されている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日中、自分の部屋で過ごされる方はほとんどいらず、ホールで過ごされる姿が多くみられる。歌番組を一緒に見ながら口ずさんだり、夕食の下ごしらえを一緒にしたり、お茶を汲んで回ってくれたり、利用者同士が関わり合う姿が多くみられる。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後も、定期的にお手紙をだし、関係性を大切にしている。ホームで催し物があるときなど、お声掛けをしたり、ホームにお越しいただいたときは、お話を伺うように努めている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の話をよく聞き、本人さんがどうしたいのか常に考えながらケアするようにしている。周りに気を使って自分の想いを表出できない方など、性格なども考慮し、希望や意向を表出しやすい環境づくりも気を配りケアしている。	職員は入居者と1対1での関りやテーブルでの手仕事に発せられた一言などを受け止め、必要な内容はプランにつなぐようにしている。殆どの入居者が自らの意向を伝えられているが、不確かな場合には家族の意見と合わせ、本人本位に検討している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	何気ない会話の中からこれまでの生活歴や馴染みの暮らし、ご家族の面会時に教えて頂いたりしている。また、馴染みの店で店員さんやお客さんなどからこれまでの暮らしぶりを教えて頂いたりし、情報収集に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	記録や申し送り通して利用者さんの今の状態の把握に勤め、スタッフ同士情報の共有を図っている。また、利用者の出来る事、出来ない事、どうすれば出来るのか等を考えながらケアを行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	定期的に担当者会議を行い本人や家族、スタッフの意見を反映し介護計画を作成している。また、毎週ケアカンファレンスを行いスタッフ同士情報交換を行いより良いケアの為アイデアを出し合い、介護計画に盛り込んでいる。	入居者一人一人のこれまでの暮らしぶりがホーム生活に反映できるよう、個々の力を引き出し、家族や関係者との関りを重視しながらプラン立案につないでいる。本人・家族の意向はもとより、ケアカンファレンスでの職員の気づきや意見をプラン内容の見直しや変更に関し、現状を見据えたものとしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の記録について、内部研修などを行い、記録の必要性や書き方など学びを深めている。またケアの実践・結果・気づきなどを記入するよう心掛け、他のスタッフにもわかりやすいように色分けして注意を引くようにして、情報共有に努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	可能な限り利用者の『したい』に応えられるように努めている。利用者さんの話をよく聞き何がしたいのか、どんな生活を送りたいのかよく聞くようにしている。買い物に行きたい、散髪に行きたい、家に帰りたいなど希望を伺い対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源として、これまでの馴染みの場所にはホーム入居後も継続して出かけ、できる限りこれまでの楽しみが継続できるように支援している。今後も地域の力を借り利用者さんの安全で豊かな暮らしの為に地域資源の活用を考えていきたい。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	日々のケアで利用者の少しの変化にも気づき対応している。何か症状があれば家族に相談し受診の有無を決定している。また、家族対応での受診時ホームでの様子をノートに記し、受診時医師に伝えていただく様になっている。	本人・家族の希望するかかりつけ医を、家族対応で行われており、ノートを活用し医師との連携やスムーズな受診が行えるようにしている。家族による受診支援が困難になられた場合は、地域の往診可能な医療機関に変更を依頼している。支援の中で体調の変化を把握した場合は、看護職員への相談により早めの受診を行っている。職員は着席中の入居者の前を通過する時など、「きつくないですか～！」など、コミュニケーションを兼ねて自然に体調を尋ねる姿が見られた。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師と准看護師を1名ずつ常勤で雇用している事により、日々のケアで気付いた利用者の小さな変化を看護師に相談し、早い段階で対応している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院の際、ホームでの様子や、ケアで気を付けてほしい事などを病院側に伝え、可能な限りホームと同じような生活が送れるようにしている。また、定期的に面会に行き、本人の状態把握、また、早期退院ができる様に支援している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	定期的に看取りについての研修会を行い、看取りケアについて学びを深めている。入居時・プラン更新時には、重度化したときの事終末期の事を確認し、元気な時から終末期はどのように過ごしたいか話し合うようにしている。	入居時に重度化・終末期に関する指針をもとに、ホームに出来る事を伝えながら、その時点での希望を確認している。看取りについては、研修協力関係のある地域のグループホームと合同で回を重ねている。この一年で初めての看取り支援が行われ、支援後はデスカンファレンスを開催し、本人を偲ぶ時間を持っている。職員は本人・家族が苦しむことのない最終の場を提供することに努めし、家族や親類など関係者が思い出話をする中で、安らかに旅立たれたようである。	今回の看取り支援の中で、食べられるものが減ってくると、どうしてもワンパターンになってしまったことを課題としてあげている。今回の支援の振り返りが、看取りの場だけではなく、今後の支援全体に活かされていくことを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	毎月の研修会のはじめに救急時の通報訓練を行い、緊急時に備えている。また、定期的に急変時の対応、災害時の対応について研修会を行っている。また、カンファレンスでマニュアルの内容を検討したり、急変時の対応で不安な事などを聞き、対応を考えている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災発生時の避難訓練は年2回必ず行い、いざという時に備えている。また、地震発生時の避難訓練や水害発生時の避難訓練も行っている。地域の消防団とも協力して訓練できるようになったので今後はご家族、ご近所の方々にも協力をお願いしていきたい。	年2回の火災避難訓練と、自然災害(地震・水害)についても訓練を実施し有事に備えている。避難場所であるホーム駐車場は広く、入居者は日常的に散歩で歩き慣れており、スムーズな避難にもつながっている。今年度、地域消防団長が運営推進会議のメンバーとして協力が得られることは心強く、今後も様々なアドバイスや関係の構築が期待されている。	今後地域の消防団員がホームを訪れ、避難誘導などに関するアドバイスを受ける予定が持たれている。近隣者や家族等へも訓練への参加を引き続き呼びかけられることが期待される。昨今の自然災害の発生被害から会議の中で、特に水の確保について課題があがっている。取組に期待したい。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	開設時より、スタッフには必ず本人の意思確認を徹底し、本人は何を望み、どうしたいのかを把握するように心がけている。また、日々の暮らしを共にすることで、言葉使いが砕けたものになってしまう事もあるが、スタッフ同士声をかけ合いながら気を付けている。	管理者は職員の予測や都合で支援方法を決定するのではなく、必ず本人の意思を確認し対応することを重要課題として指導を行っている。また、慣れ合いの言葉使いへの職員間による注意喚起や、呼称は家族にも尋ねながら、苗字や下の名で対応している。好みや季節に応じた衣類の選択、理・美容室の支援など家族の協力も得ながら、身だしなみやおしゃれの支援をおこなっている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の暮らしの中で、本人の言葉や表情、生活習慣などから、心地いい環境を察知できるよう、利用者の様子をよく観察するようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	大まかな1日のスケジュールは決まっているが、必ずそれ通りではなく、本人のしたいことを確認し、希望に添える様に対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自分の着たい服を選び、美容室・床屋にも、本人と相談し出かけるようにしている。外出の時にはいつもと違う、お出かけ用の洋服に着替え、お出かけ和楽しんでいる。時々ネイルなどもしておしゃれを楽しんでいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	行事やイベントなどでは、いつもと違った雰囲気や食事を楽しんだり、季節の食材を使った食事の提供など、楽しく食事をして頂ける工夫をしている。また、食事の下ごしらえや、味付け、盛り付けや後片付けなど、できる方ができる事をして手伝っていただく様に工夫している。	全職員で入居者の希望や季節感を取り入れた献立を作成し、専任者を中心に調理されている。入居者も下ごしらえやつぎ分けをはじめ、春には外出を兼ねてつくしやセリなどの山菜採りに出かけ、下準備(つくしの袴とりなど)を行っている。嚥下力に応じて、お粥やミキサー食、食欲が低下した方にはパン食や好物のミカン缶を準備している。誕生会は誕生日に家族へも案内を行い、会食を行っている。今年の敬老会では、これまでホームで祝膳を準備していたが、ドライブを兼ねて隣町の物産館へ、バイキング食に出かけている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事・水分の摂取量が把握できるように、チェックするようにしている。体調が優れず食事がなかなか入らない方にも好みの物を考え提供し、最後まで口から食事ができる様に工夫している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアの声掛けを行い、自分で出来る方は自分で、介助が必要な方は援助を行い清潔保持に努めている。また、訪問歯科医や衛生士などの定期検診や口腔内のケアをして頂き、清潔の保持に努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンの把握と、排泄前のサインを見逃さない様に気を付け、トイレで排泄を目指している。排泄の失敗が多い方には何が原因かカンファレンスなどで話し合い、対策を講じ、可能な限り失敗の内容に支援している。	職員は把握した個々の排泄パターンを共有し、表情やしぐさなどから声掛けや誘導の他、自立の継続ができるようにしている。また、トイレでの排泄に取り組んでおり、気持ちよく使用できるよう、3か所のトイレは清潔面からも掃除の徹底や臭気などが無いようにしている。現在、リハビリパンツの他、布パンツを使用する方も4名おられる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	なるべく自然排便で排泄ができる様に、毎朝のヨーグルト提供と、午前中の体操を日課としている。それでも便秘気味な方には薬を併用しながらスムーズな排便を促している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴時間を設けてはいるが、本人の希望を優先し、夕方や夜に入りたいという希望がある方には、その時間に対応している。個々に応じて脱衣所や浴室の温度調整に注意したり、音楽を流したり、イベントごとにしょうぶ湯やヨモギ湯なども提供している。	入浴を楽しんでもらえるよう、入居者の希望を聞き取り、可能な限り入りたい時間に支援している。基本的には週3回、午後から入られる方が多いが、中には「風呂入った後は、汗ばかくでしょ！また、入らんばんとなるけん！」と要望され、夕食後にゆっくり入られる方もおられる。明るい脱衣所、浴槽は十分な広さであり、室温は時間帯や季節に応じて小まめに対応し、浴室では音楽を流すなど工夫している。	浴室の棚に置かれた髭剃りについては、安全面から別の場所で管理することが望ましいと思われる。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	本人の体調や気分と相談しながら、日中は可能な限り様々な活動を取り入れ、生活リズムを整え、夜の安眠に繋げている。また本人の体調に合わせて休みたいときに休める様に支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	利用者が服用している薬については、すべて1つのファイルにまとめ、作用や副作用などがすぐわかるようにしている。また、必要ない薬がいつまでも服用している事がないように、本人の状態を観察し、必要時は主治医に相談するようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	楽しみや役割など、本人が何を望み、どうしたいのか、その人に合わせた気分転換の方法をいろいろ検討しながら対応している。残存能力を十分に発揮できるような支援の方法を考え続ける事が必要だと思う。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	本人の希望を聞きながら、行きたい所のリクエストに答えられるようにしている。また、年に1回は利用者・家族・職員がバスで出かける機会を設け、非日常的な時間を楽しんだり、交流を深める時間を作っている。	入居者が希望の外出が出来るよう、職員は地域の情報収集や、普段の関わりを大切に聞き取りなどから要望を把握し対応している。喫茶店の利用や花・野菜苗の購入、近隣の大型スーパーでの買い物に出かける機会を楽しみされており、敷地内の散歩や菜園の様子を見に出かける方もおられる。家族の協力としては、帰省や年1回のバスハイクは職員が行先の検討を重ね、楽しい恒例行事になっている。広報誌での外出支援の紹介は、ホームでの様子を知り、一緒に出掛けてみたいなど、家族の思いを引き出している。	筋力の低下や毎日どの位運動や歩いているのかなど、家族にとって気になる点でもあると思われる。入居者の状況に応じて、時には万歩計を活用し、家族と共有することも安心につながると思われる。取組に期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	買い物に出かけ、自分の好きなものを選び、自分で買い物をする支援を行っている。また、移動販売車にも定期的に来ていただき、自分で買い物ができるように支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	遠くに暮らす家族や親せきなど、あまり面会に出来ない方などには、電話をかけて頂けるようお願いしたり、可能であれば、こちらからお電話したりなど繋がりを感じられる支援を心がけている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホームが利用者にとって居心地の良い空間になるようにテレビの音量や職員の話声、温度や湿度など注意している。また、居室にはなじみの家具を持参していただき、少しでも自宅の雰囲気を感じられるように工夫している。	ホームはゆとりの広さで造られており、リビング食堂には、2か所にテレビコーナーが設けられ、思い思いの場所で過ごすことが出来る。廊下の壁は外出やイベント時の写真が、入居者や来訪者にもわかりやすく掲示され、この一年程のホームの活動を知ることができる。職員の明るい声やメリハリのある声掛けは居心地よく、温湿度や照明も入居者の状況に応じて管理されている。この夏設置された玄関先のロールカーテンによって、事務所やリビング内の室温にも効果が表れているようである。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールには数多くのソファを配置し、ゆったり過ごせる様にしている。また、畳のスペースではこたつを用意し、こたつでテレビを見たり、転寝をしたりされ、思い思いの場でくつろげるよう空間づくりに努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居後も、利用者との話の中から得た情報をもとに、本人が好きだったものや、馴染みの物が分かると、ご家族に相談し持参していただく様になっている。また、夏場は日差しが強く居室にすることが出来ない為サンルーフを設置し居心地よくなるようにした。	入居の際、新しいものではなく使い慣れた品の持ち込みは安心につながることを家族へ説明している。入居後も職員は会話の中から本人にとって大切な物や必要な物などを把握し、家族と協力しながら環境の整備を行っている。広さも十分な居室には寝具やタンスの他、テレビを持ち込まれた方もおられるが、日中は特にリビングのテレビを他の入居者と一緒に見られるようである。	この夏は各居室の窓に、強い日差しを和らげるためにサンルーフが設置されている。これらの取組は家族へも伝える事で安心や、面会時の本人との会話にもつながるものと思われる。口頭やホームだよりで紹介するなど取組に期待したい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	職員は利用者の能力をしっかり観察し、できる事・わかる事を把握した上で、残存能力を生かしながら、安全に過ごせ空間づくりに努めている。		